

## 巻 頭 言

宇田川 芳江

能登半島地震から2カ月。地震によって亡くなられた方々に謹んで哀悼の意を表するとともに、ご遺族と被災された方々に心からお見舞いを申し上げます。

懸命のインフラ復旧作業が行われているなか、まだ1万人以上が避難生活を強いられ帰還時期のメドが立たないと聞く。被害の大きかった石川県には10年以上前に要約筆記者研修の仕事で訪れたことがある。地元の人に勧められて朝早く起きて輪島朝市に出かけ、海産物を買込んだり、手作りのアクセサリを売っているところでは、今もつけている稲穂のブローチを買ったりした。輪島塗の工房の見学もさせてもらった。地震で崩され、火災でとどめを刺された輪島朝市の様子をニュースで見ると、胸が締め付けられる思いがする。新聞で目にした「地震は獣のように残酷だ」という見出しが頭から離れない。自分にできることは、わずかな金額の募金や応援消費ぐらいだが、いつも被災地のことを思い、忘れないでいたい。

団地の自治会役員になった。住んでいる以上順番に役が回ってくるので、聞こえないとか、仕事を理由に逃げることはできない。高齢者が多い団地に住んでもう8年になるが、昼間は不在だし帰宅は夜遅いので、近所づきあいはゼロに近かった。団地ができたときから住んでいる人が多いためか、役員会は顔見知り同士のやりとりが多く、ときには容赦ない言い合いも起きて驚くばかり。

2月の新旧役員顔合わせで、パソコンで書類を作れる人がいないと聞き、そのくらいならやりますと手を挙げた。私が実際にできるのはワードとメールの送受信ぐらいだが、いつの間にかパソコンが得意なと言われるようになって焦っている。役員会を行う集会所は狭い。役員が集まると要約筆記者が書く紙やノートパソコンを置くスペースが取れない。仕方なく手話通訳者を依頼して参加している。それが結果的には目立つことになり、顔を覚えてもらえ、すれ違ったときには挨拶もしてもらえるようになった。

以前、生協、デパート、スーパーなどで働いてきたが、話すことはできるが聞こえにくいことを知ってもらい、人間関係を構築していくのには時間が必要で、苦労も多かった。役員任期の1年間は、協会活動で培ってきた蓄積を活かし、聞こえにくい者の存在や、コミュニケーションの工夫のしかたなどを知ってもらえる良い機会を与えられたと考えるようにした。団地の掲示板には、災害時の自助の大切さの促しが書かれていた。団地や高層住宅に住んでいる人は、災害の時に避難所には入れてもらえないことになっているともあった。団地の防災訓練などにも通訳付きで参加し、自分のできることを精一杯やり、できないことを助けてもらえる関係をこの1年で作っていったらと願っている。（2024年3月3日記）